



# フランシスコ教皇様 来日

2019.11.23～2019.11.26



## すべてのいのちを守るため PROTECT ALL LIFE

那珂教会主任司祭 成田浄司神父

時のたつのは早いもので、今年も最後の月、師走に入りました。教会の典礼カレンダーを通してもう一度、神の慈しみ深い救いの業をたどりながら信仰、希望、愛を深める新しい一年を始めたいものです。この令和元年をふりかえってみれば、やはり1月の献堂銀祝記念ミサ、そして、11月のブライアン神父の水戸でのすばらしい叙階式が特筆されると思いますが、県内の他の教会の方々と協働しながら立派に終えることが出来ました。皆様のご支援、ご協力、ご親切のおかげとこころから感謝申し上げます。

特に那珂教会・水戸教会が一つになってできあがったみこころ聖歌隊はいろいろな場面で美しい歌声で式典を盛り上げ、参列者へのおもてなしをしてくださったことなど、とてもうれしく誇りに思っております。ご苦勞様でした！！

またこの1年間、高齢者、年金生活者の方々が多く中で、経済面でもみこころ修道会、さいたま教区の宣教司牧のために犠牲を払い維持費を負担して下さっておられること、個人的には免許証がないため、移動の際の経費JR 東海駅～教会間のタクシー代を時々負担していただいておりますのでそのためにも厚くお礼申し上げます。

先日、11月23日～26日にかけて教皇フランシスコが訪日されました。25日に東京ドームでの教皇ミサを挙行されました。入場できない方も大勢でしたが、全体で五万人以上だったようです。那珂教会からも希望者が20名ぐらい応募しましたが、残念ながら半数の方々はテレビで参加されたようです。でもその方が大写しなどもあってより臨場感が強かったのではないのでしょうか？

日本のマスメディアも大々的に取り上げ、あの四日間は、みんながカトリック信者みたいな感じでしたね。！？紙面も限られておりますので、ポイントだけこころに残ったことなどを書き留めておきます。

—フランシスコは若かりし頃、日本に行きたいと願ったが病気で出来なかった。イエズス

会員として与えられた仕事に熱心に取り組んだが、今回来日する日まで長い期間にわたって日本のことをよく勉強されたのではないのでしょうか。その博識に驚きました。まるで日本に何年も住んでおられるようなかんじでした。日本と日本人に対する愛と敬意を強く感じました。

—現代社会と現代世界を良くご存じで、賢明な判断をされる方。特に経済、権力、国力、武力といった格差を大きくするようなものには気をつけなさいと忠告しているようです。訪問に際して選ばれたテーマが、「すべてのいのちを守るため」であらゆる人の価値と尊敬を守る強い思いをお持ちで、核戦争反対、核兵器の使用は倫理に反する。

—すべての人を大切にする。ある民族や宗教、階級、病気や障害、無宗教など。今回は車椅子の方がたも入場できた。貧富の差の解消など、救いはすべての人のため。

—あいさつやコメント、それぞれ心に響くような応答をされ、まわりの人々を大切に。

—行動的。決めたことはすぐ実行に移す準備をされる。謙虚で勇気がおありで、悪いことは悪いとはっきり話される。

—このようなすぐれたリーダーである教皇をいただく私たちは最高に幸せであることを実感。確実にナンバーワンの宣教師です。

—明るい笑顔が最高。物事を肯定的に受け止める。

—教皇を辞任されたらこのような「世界の教会の主任司祭」をここ那珂教会にお迎えしたい！？

ラ・ルース

発行  
カトリック  
那珂教会  
〒311-0109  
茨城県那珂市  
額田東郷  
480-1

## 娘の堅信式に寄せて

堀井 泰明

5月26日に水戸教会で娘ゆいの堅信式を無事に終えることが出来ました。式では那珂教会の照沼様に代母をして頂き、誠にありがとうございました。また、教会の皆様からはたえまなく励ましのお言葉も頂戴し、本当にありがとうございました。札幌から那珂教会に移って以来ずっと、皆様からの優しいお言葉に支えられながら、家族一同過ごせて参りました。これからもどうぞよろしくお祈りいたします。自分の堅信式を振り返りますと、今から20年以上前になりますが、上智大学でイエズス会のリーゼンフーバー神父様から洗礼式とセットで受けました。当日はたくさんの方々にお祝いの言葉を頂いたのを昨日のように思い出します。その時の気持ちを娘の堅信式を通して思い出すことが出来ました。今後とも家族一同、よろしくお祈りいたします。

## 今年のバザー

照沼 めぐみ

バザーの1週間前の5月25日に、那珂教会献堂25周年のお祝いで地域の方々に紅白饅頭をお配りしました。澤崎さんとチュオンくんが重たいお饅頭を持って、成田神父さま・船橋さん・大澤芳さんで48軒の訪問です。皆さんの「もう25年ですか！おめでとうございます！バザーを楽しみにしていますよ。」の言葉がとても嬉しかったそうです。そして6月2日、今年は1週間遅く開催となったバザー。司教様の訪問と諸教会の行事が重なった為に日立教会の美味しいスイーツも残念ながらお預けとなり、水戸教会もいつもの顔が少なかったです。それでも那珂教会の皆は一致団結、地域の方々とも交流しながら晴天の中楽しい時間を過ごすことができましたね。ダルクの仲間は、恒例の焼鳥と焼きそばの材料を手にも参加してくれました。そして遠藤さんともう1人の方はミサに与り最後にご挨拶をされました。私はダルクの仲間に信者がいる事を知らなかったのも、それは本当に嬉しい喜びでした！バザーがお開きになるとダルクの皆さんと水戸教会のボーイたちは率先してテントの撤収を手伝って下さり、平均年齢が高くなりつつある那珂教会のメンバーは本当に助かりました。25年経ち教会のメンバーの体力も万全ではないので、これからのバザーの在り方とやり方を今一度皆さんで考える必要があるのかもしれないですね。誰も居ないいつもの広い芝生のお庭を眺めながら、そんな事を思いました。

## 「音楽の豊かさ」 アトリエだより

浅田 隆

間もなく、ここアトリエも15年目に入る。絵と音楽の空間として色々な催しをしてきたが、それらを通して多くの音楽に接してきた。クラシックが中心だが、映画音楽や民謡、ジャズやシャンソン、日本の唱歌など、様々な音楽が流れた。国や地域も様々で、10回を数えた「絵と音楽による世界の旅」では、世界中を回った。音楽は絵と共に、古くから人類と共にあり、その地域地域で生まれ伝承され、そして影響しあってきた。北インドを起源とした移動型の民族で、中近東、北アフリカ、ヨーロッパなどを放浪したロマ（ジプシー）の音楽はクラシックに影響を与え、アメリカで生まれたジャズにはアフリカから連れてこられた黒人の苦悩が反映している。音楽は影響しあうことで豊かになる。敵対や排除ではなく、融和がその命である。そこに暮らしている人々を尊重し、共感し、心を通わせる。そこに音楽の持つ力もある。時代を越え、地域を越え私たちに豊かにしてくれる。国同士の争いや、憎悪の声を目にし、耳にすると、そんなことを思う。

## 結婚式

エリザベト 阿部友里

降りしきる長雨の中、その日だけは雲ひとつない快晴でした。幼い頃からいつの日かと夢に見た那珂教会での結婚式。それが現実となる日が来るなんて。父とこのお御堂のバージンロードを歩く日が来るなんて。私はこんなに幸せでいいのだろうかと何度も思った一日でした。結婚式を挙げてくださりました成田神父様、当日を迎えるに当たりお忙しい中、沢山のご協力を頂きました信者の皆様、那珂教会での結婚式に理解を示してくれた彼の家族、施設からお祝いに来てくれた二人の祖母、そして愛する家族に心からの感謝を申し上げます。これから先どんな苦しみや悲しみがあっても、この日のことを思い出し喜びと感謝の気持ちで過ごすことができますように。

## 銀婚式を迎えて

ジョン 澤崎正一

この度、6月30日に那珂教会で結婚25周年の銀婚式を迎えられたことに感謝いたします。

そもそもは、軽い思い付きでした。2月頃に、「25周年の節目なので、6月末か7月初めのミサの中で神父様に祝福をしてもらえたらいいね」と話していました。が、特に何を準備するということなく、6月に入るまでのんびりしていました。

そして、以前に話していた時期が近づくにつれ、「そういえば、神父様に祝福をお願いしなきゃいけないな」とか「子供たちも呼ばなきゃ」とか、「誓いの言葉を入れたほうがいいのでは」とか、「指輪の交換も必要?」とか、「軽い食事も必要?」とか、「本間神父を呼ぼうか、友達を呼ぼうか」、などなど、2週間くらい前からどんどん内容がふくらんでいきました。

ちょうどその時期は、私が6月中旬から7月中旬まで埼玉に出張していたこともあり、銀婚式の内容について成田神父とは1回しか打ち合わせすることができませんでしたので、ちゃんと神父様と打ち合わせしたのは、2週間前のミサ後の1回だけです。それでも、成田神父とミサ中の銀婚式への移行要領や、誓いの交換などを軽く練習し予行は終了。2週間後の本番を待つだけとなりました。そして、銀婚式の当日、急遽千葉から駆け付けた息子と娘を連れて教会に行き、事前の打ち合わせ内容について神父様と確認しました。ミサが始まり、あまり緊張することはありませんでしたが、誓いの言葉をちゃんと妻に伝えられたらいいなと思っていました。振り返れば、25年間、ちゃんとした言葉で妻に感謝の言葉を伝えたこともなく、ましてや人前でなど考えてもみませんでした。誓いの言葉で伝えたかったのは、自衛隊という職業を理解してくれ、訓練や演習はもちろんのこと、単身赴任や海外派遣などの長期の留守の間であっても子供たちや家を守ってくれていたことへの感謝でした。ミサの中で、信者の皆さんからも祝福していただき、軽い思い付きから始まった銀婚式でしたが、帰るときには「やってよかったね」「次は金婚式だね」と盛り上がり帰りました。成田神父、25年後またよろしくお願いします。

## 令和の時代

フランシスコ 大澤卓司

平成が終わり、令和が始まりました。天皇陛下の即位で元号が変わり、時代も改まったように感じます。徳仁天皇（浩宮様）はお誕生日が私より四日早い同い年です。彼は天皇陛下となられて、これからの人生は重責であることは、大変なことだと平民ながら感じております。さて、我が家は二人の娘が次々と結婚し、教会での結婚式には多くの方々のご協力をいただきました。あらためて御礼申し上げます。結婚式を那珂教会と水戸教会で挙式できましたことは、親として信者として、こころから感謝しております。神様がわたしたち家族と共に、また共同体と共にあることを、幸せであると感じています。「信仰は家族から」という言葉はとても重く。子が結婚し新しい家族を創っていくこととなった今、初めて、信仰も受け継がれて欲しいと思うようになりました。若い夫婦の愛が育まれるように祈ります。そして、誕生してくる孫が健やかに育つように祈ります。また、ブライアン神父叙階は、感激の一言に尽きます。ブライアン神父を育てたご両親に感謝致します。日本の地に神父として導かれた神様に感謝致します。今年はたくさんの出来事があった、新しい時代の幕開けと感じておりました。しかし、今年も変わらずにクリスマスを迎えて、神様が共にいることに安堵いたしました。皆様のご家庭にも主の平和がありますようにお祈り致します。

## 献堂 25 周年を終えて

ベルナデッタ 大澤芳

平成最後の年の1月14日、那珂教会献堂25周年記念ミサ及び祝賀会が那珂教会の御聖堂と集会室で行われました。本間管区長始め歴代の神父様方と三位一体の聖体宣教女会のシスター、そして約100名近い信徒の皆様をお迎えして、献堂当時の足跡を振り返り、懐かしい友人との再会に喜び、祝い、すばらしい献堂記念日となりましたことを、心より感謝申し上げます。

何より神様に喜んで頂ける式典にするために、私たちは準備段階で、様々な心配が頭をよぎり悩みも致しましたが、御聖堂に入りきるだけの丁度良い数のお客様と暖かい小春日和のようなお天気に恵まれ楽しい思い出深い一日となりました。

歴代の神父様方と共に与る荘厳なミサと、マーフィー神父様のアコーディオン、有志によるハーモニカやフルート、チェロのアンサンブル、みこころ聖歌隊の混声四部合唱によるアーメンコーラス、黄門体操など大いに盛り上がり、皆様のおかげで忘れられない一日となりました。

那珂教会は小さな教会です。台風などの自然災害が発生した時は、お互いに声を掛け合い安否を確認したり、銀婚式、結婚式、洗礼式、七五三などでは、たくさんの方の信徒の皆さんが集まり、自分のことのように喜び祝います。こうして、お互いを思いやり、尊敬し、支え合いながら歩んだ25年の月日が当たり前のように流れてきたのは、ミサの最後に唱える那珂教会の祈りのお恵みと思わずにはいられません。

夕方、御聖堂の中が暗くなると、外の光に照らされたステンドグラスが一層美しく光り輝き出されます。生前の船橋和子さんの御言葉通り、それは、まるで宝石箱の中にいるようです。25年前、この美しい教会を建てられた本間管区長や信徒の皆様を改めて感謝申し上げます。こんな私でも「よし」として下さる神への感謝の集い、そして、憐れみ深い神への賛美の集いが、ここ、那珂教会でいつまでも、いつまでも続いて行きますように祈ります。

## 聖霊の光輝く中で ブライアン神父様叙階

加藤 哲子

11月4日、夜半の雨も止んで、清々しい朝を迎えました。駅に向かう車の中から外を見たわたしは、ウワッ！空がきれい！と思わず声を出すほどに、真っ青な空に白い雲が浮かんでいて、まるで今日の日を祝福しているかのようです。

水戸駅から10分程のところに叙階式が行われる京成ホテルがあり、二階の大広間へと案内されました。11時に山野内倫昭司教様の主司式で叙階式のミサが始まり、ことばの典礼ではテモテへの手紙が朗読されました。

— 神は、臆病の霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです —

— 神がわたしたちを救い、聖なる招きによって、呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるものです —

ヨハネによる福音朗読のあと、司教様の説教があり、司教様になられて初めての叙階式であること、司教様になられて間もなく、本間管区長様より連絡があって — これからいろいろな困難に直面するかと思います、お疲れになられました時にはいつでも友部の修道院にいらしてください。お部屋を開けて待っていますから — というやさしい言葉をいただいてうれしかったこと、ブライアン神父様のご両親に対しては、大切に育ててくださったブライアン神父様をわたしたちのために、神様の働き手として捧げてくださったことへの感謝の言葉を述べておられました。また、会場に大勢の外国の方が参列されていますが、これからは国の違いを越えて、共に手を取り合って、よりよい共同体をつくっていく時代がきていると話されていました。

司教様の説教の後、叙階の儀に入りました。山野内司教様は、ここにご列席の皆さん、と呼びかけられて — 司祭は、福音をのべ伝え、神の民を牧し、特に主のいけにえによる神の礼拝を司式するために、永遠の大祭司であるキリストに似た者となって、司祭の祭司職に結ばれるよう、新しい契約の真の祭司として聖別されるのです —

と、一言、一言ハッキリと読みあげられた司教様は最後に、キリストに従って牧者の任務に励んでください。仕えられるためにではなく、仕えるために、失われたものを捜し求め、救いへ導かれるために来られた良い牧者である主の姿を、いつも目の前に保つようにしてください。と結ばれました。

そして、いよいよ式の真髄、受階者(ドン・ブライアン助祭)から、司教様と参列されている方々への決意表明です。

司 教：あなたは、ご自身をわたしたちのために清いいけにえとして、父におささげになられた大祭司キリストに、日一日と固く結ばれ、キリストと共に自分を人々のために奉献することを望みますか。

受階者：神の助けによって望みます。～

司教：あなたのうちに、よいわざをお始めになられた神ご自身がそれを完成してくださいますように。

叙階されたブライアン神父様がひれ伏したままの状態、諸聖人の連願が唱えられます。先唱されたのは那珂教会の沢崎さんとリカルドさん、お二人の心が一つになってすばらしい連願でした。そのあとは、按手と聖別の祈りに続き、祭服の着衣、塗油、祭器具の授与があって、叙階の儀は終わり、信仰宣言からミサは続いていきました。

叙階されたブライアン神父様がひれ伏したままの状態、諸聖人の連願が唱えられます。先唱されたのは那珂教会の沢崎さんとリカルドさん、お二人の心が一つになってすばらしい連願でした。そのあとは、按手と聖別の祈りに続き、祭服の着衣、塗油、祭器具の授与があって、叙階の儀は終わり、信仰宣言からミサは続いていきました。

主の祈りはタガログ語で歌われ、聖心聖歌隊が歌う美しい主の祈りが神様への感謝と賛美で満ち、聖霊の光と喜びが会場を包み込んでいるかのようでした。派遣の祝福と共にミサは終わり。新しい司祭、ブライアン神父様の挨拶。新司祭の挨拶は感謝と喜びに溢れていました。

最初に、体調をくずされて出席できなかった両親に対して、温かい家庭をつくり自分を育ててくれたことへの感謝の気持ちに始まり、支えてくださった大勢の方々、祈ってくださった方々、聖心会の神父様方々・・・と。一言一言ハッキリと心を込めて感謝のことばを話されるブライアン神父様。そのブライアン神父様をやさしい温かい眼差しで愛しそうに見守る神父様方の姿に私は深い感動を覚えました。

全員が部屋を出て30分休憩の後、大広間は祝賀会場に早変わり、会場にはたくさんのテーブルとごちそうが用意されていました。大勢の人が一同に集り共に食事をする。何と和やかで華やかなことでしょう。一人ひとりがすてきな衣装で装い、自国のことばで話し喜びを共にする。この会場の姿こそ神様が望まれる共同体の姿ではないだろうかと思いました。

祝賀会で本間管区長様は、次のように挨拶されました。今日、ブライアン神父が叙階されました。日本の地で宣教を望まれたブライアン神父は叙階によって神父になったのではありません。これからの日々、皆さんとの係わりの中で支えられ、育てられ、成長し神父になっていくのです。この挨拶を聞いて、若い司祭の誕生に喜びと期待だけだったわたしは、一信徒として小さな責任を感じました。

祝辞のあと、各教会の余興が始まりました。歌あり、演奏やダンスあり・・・と続いて、山形教会の花笠音頭の曲が流れ、会場に大きな踊りの輪ができました。その輪の中に先ほどまで各テーブルを廻り、片手をテーブルについて腰をかばうようにしてにこやかに話されていた本間神父様の姿がありました。ダミアン神父様のような帽子を被って踊られるその姿イエズス・マリアの聖心を心として日夜働いてくださっている現代のダミアンのように、わたしには思われました。

フィリピンと日本の二人の司教様とローマから聖心会の総長様も出席されて、50人近い司祭団と500人近い参列者のもと、22年ぶりに日本で行われた叙階式は盛大で和やかで喜びに満ちた素晴らしい時間でした。

余興はまだ続いていましたが、電車の時刻が迫り帰途につきました。

父なる神様、イエズス・マリアの聖心会に若い働き手を遣わしていただきましたことを感謝します。ブライアン神父様のこれからの日々をお守りください。

いろいろな困難や孤独感におそわれた時、今日の喜びの日が試練を乗り越える力となりますように。

感謝のうちに。

## ようこそ!平和の巡礼者、『フランシスコ教皇!』

マリア 鈴木 睦子

38年前にヨハネ・パウロ二世が来日した時、私は吹雪の長崎でのミサにあずかりました。釧路カトリック幼稚園の職員研修という自然の流れの中で何の苦勞もせず参加できたのです。

今回は全く違いました。来日が決まった時から、「教皇様にお会いしたい!」「同じ空間で生の声でお話を聞いたら何かが変わるのではないか」という期待がどんどん膨らんできたのです。秋に入り、マザーテレサの取次ぎを願ってノヴェナの祈りを繰り返し、招待状を心待ちする日々でした。

しかしチケットは届きませんでした。諦めきれず、何かの奇跡が起きないかと思いつつ、遂にパパ様来日の日。仕事のストレスから突然体調を崩し、夜半から明け方にかけて激しい腹痛と頭痛に襲われたのです。年間最後のミサに何とか行けたものの、折角の水戸教会でのパブリックビューイングに行く気力もないまま翌日25日になりました。

水戸教会の聖堂に入ると、明かりを落とした薄暗い聖堂の正面祭壇の前に大型スクリーンが設置され、東京ドームでパパ様を待つ人々の姿が美しい音楽や聖歌とともに映し出されていました。用意されたミサ式次

第をいただき私たちが静かにパパ様の入場を待ちました。いよいよフランシスコ教皇様の入場です。幼子たちへの祝福、人々の喜びにあふれた表情に次第に胸が熱くなってきました。「まるで本当にパパ様が目の前にいらっしゃるみたいね！」と隣の橋爪さんと静かな興奮を分かち合いました。祈りを唱える時、聖歌をうたう時、私たちが一緒に祈り歌いました。東京と水戸、距離的に隔たりがあっても、同じ時間に心一つにして祈ることで、空間を超えてシンクロナイズしていると感じました。

ご聖体拝領が始まった時一瞬寂しい気持ちがよぎりました。その時、暗闇の中で水戸教会の聖体奉仕者の方が静かに前に立たれたのです。思わず私と橋爪さんは目を合わせ、驚きと喜びのうちに大きなギフトを拝領しました。私の求めたものは届かなかったけれど、祈りは届いたのです！

この一週間前、青年会の頃からの友から電話があり、抽選に外れて落胆する私に、「パパ様が私たちと同じ日本にいらっしゃるという事は、凄いことなのよ！」と話してくれた言葉がすっと腑に落ちた瞬間でした。

不思議な事に、腹痛も頭痛も気分の落ち込みもいつの間にかすっかり消え、癒されている自分に気付きました。素晴らしい企画に招いてくださった水戸教会の有志の方々とドネガン神父様に心から感謝し、賛美のうちに聖堂を後にしました。

翌日、信者ではない私の姉からメールがありました。「素晴らしい演説と人々の熱い歓迎に感動しました。人間性に神々しさを感じ、信仰の素晴らしさに胸をうたれました。」と。これを見て、教皇様のメッセージはカトリック信者だけでなく、平和を求める日本中、世界中の人々の心に届いたと確信しました。

ローマ教皇が広島と長崎で世界に発信したことば一核兵器のない世界、非武装であることが真の平和を生むこと、私たち一人一人が野戦病院にならなければならない事。更にミサ説教でのことば一『くよくよせず信頼しなさい』『主と同じ方向に目を向ける余地を残しなさい』『すべての命の尊さ』等々、いつくしみに満ちたフランシスコ教皇の魂の言霊(ことだま)のひとつひとつが今も私の耳にこだましています。

パパ様 有難う！ 神様 有難う！

## 教皇様ミサに参加して

佐藤 恵子

11月25日東京ドームで行われたフランシスコ教皇様のミサに参加する幸運をいただきました。水道橋の駅を降りると、様々な国のたくさんの人々が明るい表情でドームへと向かっていました。厳重なセキュリティチェックを受け会場に入場したとたん、大きな白い十字架が設えられた祭壇が目に入り込んできました。「もうすぐこの場に教皇様がいらっしゃる」そう思うだけで胸が高鳴りました。やがてたくさんの拍手と歓声に迎えられてオープンカーで入場してきた教皇様。ゆっくりと場内をまわりながら声援に応え、抱えあげられた小さなお子さんの額に祝福のKissをする度に、歓声はいっそう大きくなりました。ミサが始まると、私は参加できなかった皆さんの分までお祈りしました。教皇様はタイトな日程の疲れを見せずにしっかりとした口調で話されました。

福音朗読で引用された山上の説教(マタイ6・25、31、34)について

「思い悩むなどは、周りに無関心であれ、自分の務めに無責任であれといっているのではない、むしろ、展望に心を開き、そこにもっとも大切なことを見つけ、主と同じ方向に目を向けるための励ましである」

「孤立し、閉ざされ、息ができないわたし」に抗しうるものは、「分かち合い、祝い合い、交わるわたしたち」しかないと言われました。

続けて話された「完全でもなく、純粹でも洗練されていなくても、愛をかけるに値しないと思ったとしても、まるごとすべてを受け入れるのです。障害をもつ人や弱い人は、愛するに値しないのですか。よそから来た人、間違いを犯した人、病気の人、牢にいる人は、愛するに値しないのですか。イエスは、重い皮膚病の人、目の見えない人、からだの不自由な人を抱きしめました。ファリサイ派の人や罪人をその腕で包んでくださいました。十字架にかけられた盗人すらも腕に抱き、ご自分を十字架刑に処した人々さえもゆるされたのです」という言葉に私はハッとしました。

現在精神に障害を抱えている父と同居していますが、問題を起こして周りに迷惑をかける父の言動に心がついていけないことが度々あります。頭で病気のせいとわかっている、私の心が父への理解と歩み寄りを拒否してしまうのです。

教皇様が「完全でもなく・・・病気の方は、愛するに値しないのですか？・・・イエスがご自分を十字架刑に処した人々さえもゆるされた。」とおっしゃった言葉が深く心に刺さり、自分のあり様を重ね合わせると、戒めと励ましと希望で胸がいっぱいになり、こみ上げてくる涙を抑える事ができませんでした。

入念な準備の下、多言語で行われた素晴らしいミサを私は一生忘れる事はないでしょう。

このミサに参加できた事、その意味は何だろう。教会での役割・日々の生活にどう役立てどう行動したらいいだろう。それを今でも考え続けています。それほど貴重で深い経験でした。

「不安と競争心、生産性と消費への熱狂的な追求、すべてを作り出し、征服し、コントロールできると信じる熱望が、わたしたちの心を抑圧し、縛りつけている」

「経済的に高度に発展した日本の社会において、孤立している人が決して少なくなく、いのちや自分の存在の意味を見いだせず、社会からはみ出していると感じていることに気付かされた」

「核兵器の使用と保有は倫理に反する」

そして「すべての命を守り、抱擁し、受け入れよう」

これらは来日中に教皇様が発した言葉です。それぞれの言葉がひとり一人の心に響き渡り、もう一度自分のあり様や社会を考えるきっかけを与えてくださいました。

小さな事からでもいいですね、教皇様。

「主の平和」この祈りの言葉に真心を込め、穏やかな気持ちで回りと向き合うことから始めます。

## 教皇ミサの感想

リンペンホン

教皇フランシスコ司牧訪問（11月23日～26日、東京・広島・長崎）についての情報を夏に入ってから調べはじめました。11月25日に東京ドームで教皇ミサが行われると知っていました。9月に那珂教会の委員会から教皇ミサの参加案内が届きましたが、6人組での応募と倍率の厳しい抽選という制度を聞きました。那珂教会は分教会なので応募のための教会コードはなく、水戸教会を通しての参加応募となり、参加できる可能性がさらに小さく、半分あきらめた気持で応募しました。佐藤さん、成願さん、リカルドさん一家と組んで、佐藤さんに応募手続きをやって頂きました。当選していない方々には大変申し訳ございませんが、私たちの組が奇跡的に当選されました。喜びと神に感謝。

教皇ミサの会場である東京ドームは、数十年東京都や茨城県に住んでいたのに実は初めてですので、少し早めに会場へ電車で行きました。水道橋駅に近づくと、電車の中でも、普段よりにぎやかで日本人や多国籍の信者さんも大勢乗っていると見て、お祭りの雰囲気を感じました。予想通り、駅も、駅から会場への道も混雑していて、決まったゲートから入ることはできなく、他のゲートに誘導されやっとドームに入りました。安全のために身分証やボディー・チェックが行われましたが、警備員やスタッフの方々は非常に親切で、案内も丁寧でした。特に日本語はあまり分からない参列者に対しても丁寧にチェックや案内が行われていて、高く評価し感謝しました。

私たちの組は2階のスタンドで1番前の席に座りました。ドーム内はグランド及び1・2階スタンドはほぼ満席でした。教皇ミサがテレビ中継やYouTube等で放送されましたので、内容そのものについてはここには述べません。教皇ミサの感想は、正直に言葉で表せなく、素晴らしかったのです。自分の年齢を自覚して一生2度と経験できないであろうと思い、格別な恵みとして受け止めました。参加できない那珂教会の皆さんやご家族のためにも頂いた恵みを分けたいと願って祈りました。教皇様は、ドームに入場して車で回って参列者に挨拶した顔が長崎・広島へ訪問した時より、元気に見えました。しかし、ごミサが始まると、表情が変わり、沈黙の時だけでなく、あく時間に必ず手を組んで祈っていました。私たちのために祈っていることは間違いないと思います。

教皇様の来日テーマは「すべてのいのちを守るため」となり、広島・長崎・東京の訪問の行事やごミサの説教の時にそのメッセージがはっきりと伝えられました。まさに日本国内の事情や日本社会が今直面している課題に対して、カトリック教会が示している基本姿勢だと思います。しかしながら、カトリック教徒として、実際に日々の生活にそれを実施するにはかなりの努力や犠牲が求められています。私たちは弱い人間ですので、愛の源である神様から、力と導きを願って、一步一步、進むしかありません。

教皇様は、11月24日長崎の訪問の時に「長崎から世界へ核兵器廃絶」のメッセージを発信し、25日東京で開かれた「東日本大震災被災者との集い」で「私の兄弟である日本の司教たちがいみじくも指摘した原子力の継続的使用に対する懸念であり、司教たちは原発の廃止を求めました」をスピーチの中で述べました。前者のメッセージは人類の共通の願いであり、私たちは絶えずに努力して核兵器のない世界を目指さなければなりません。後者のメッセージは、私にとって長い年月に考えさせられた課題でもあります。

大分昔、茨城県使徒職の活動で、さいたま教区運営委員会のメンバーとして務めた頃、司教様からクリスマス・カードとお正月の手紙を頂きました。その手紙の中のメッセージにも「原発の廃止」の文が書かれたことを思い出しました。先日、ドン・ブライアン神父叙階式の時に、さいたま教区のある助祭に、「まだ原子力分野で働いていますね」と聞かれました。私は（もちろん平和利用の目的で）原子力分野の仕事をしており、はっきりとした返事は言えませんでした。大学でより安全な原子炉の研究・教育、核の力によるがん治療研究開発支援等をしており、本当に原子力は相応しくないのか、そんなに悪いのか、時々考え、悩んでいます。確かに原発の事故の結果を見て反省すべきものが数えきれないほどあります。また、カトリック教の根強い上智大学で原子力について全く知らない若い学生たちに原子力の基礎を紹介する授業を担当しております。最終的に原子力利用や原発の存続の決断は国民にありますので、将来決断する若い世代に、正しい知識や鋭い判断力及び責任のある決断力の教育を務めてみます。部分的に責任逃れと言われるかも知れませんが、今のところ、私はやれるのがこれしかありません。記事に教皇ミサの感想について頼まれましたが、自分の悩みまで書いてしまったりして、感想文をこの辺に終わりにします。

## 聖地巡礼、キリストのように生きたい

タルチシオ 成願 強

2019年2月に聖地巡礼に妻を同伴して参加した。「道の会」の井上弘子さんのガイド、オブレート会のジュード神父様の引率でした。巡礼は仁川から弟妹4人と横一線の席でイスラエルのベングリアン空港を目指し、ホテルには午後10時に到着。最初に地中海に面した3千年前の街ヤッファからヘロデが造った港カエサリア迄、当時の路地や海岸を歩いてヘロデの別荘に立った。円形劇場があり、その中央にはオーケストラ・ポイント（音が集まる場所）を実感した。劇場の前で聖歌「ガリラヤの風おおる丘で」をリクエストし、皆で合唱して感激。港へ向かう途中で「ピラトの存在を示す物があります」と言われ、白い石片を見ると *pirato* と刻まれて在り、一気に聖書が現実な物となった。ヘロデの力を示す建造物と対比する柔和なキリストの姿を比べて、静かな感動を覚えた。地中海の強い風に吹かれて歩いてから、バスで山を登り、預言者エリヤの像があるカルメル会の本部修道院に着いた。ミサ後に売店の裏にまわるとナザレが一望できた。緑濃い大パノラマをしばらくの間、うっとりとして眺めていた。ナザレに行く途中に、大きな石で入口を塞ぐ形式の小さな洞窟墓が在り、イエスの墓を彷彿とさせてくれた。夕刻にはナザレに入り、イエスが突き落とされそうになった山に立ち、祈りのひとときを過ごした。翌朝は徒歩で「受胎告知教会」に行き、小聖堂（聖アンナ）でのミサを挙げた後に壮麗広大な聖堂内を巡ると地下の格子扉の洞窟の中におられるマリア様を見つけてアベマリアを祈った。各所に聖画があり、日本からの「華の聖母子」もあった。彩色の道行きやマリア像などが沢山あった。街では聖地マークの扉を入り、当時の家の遺跡を見た。それは石灰岩を削って造った半地下のもので、玄関から下がった場所が居間で夫は防御の為に玄関で眠っていたそうだ。大工の家とのギャップが大きかった。外にはガブリエルのお告げや聖母子等多くの絵画が飾られていた。日本からの「マグニフィカト」も掛けられていた。お昼は街中の薄暗い店で取ったがイスラエルのバーガーとも言える「ピタパン（薄いパンを半分に切って具を入れる食物）」で具は3種類から選ぶがどれもが美味しかった。田舎道を移動してカナの「婚礼教会」に着いた。カナの街には6個の樽とイエスの絵や奇跡の説明書きが刻まれていた。聖堂は石造りでシスターがお掃除をしていた。比較的小さく、落ち着いた教会で那珂教会を思い出した。次いでシモンのチャペルで福音を聴いた。それからガリラヤに向かう。途中は岩と少しの緑だったが徐々に緑が濃くなり、タブハの聖変化を記念する「魚とパンの教会」に着いた。祭壇は質素だったが床にはビザンチン時代のモザイク画で4つのパンと2匹の魚、鳥が見事に描かれていて、悠久の歴史を語ってくれた。「至福の山修道院」に着くと自由に院庭を散策した。その夜、分かち合いの後で「結婚の誓い」の更新が行われた。突然の事で驚いたが、私達も祝福と証書を頂き、心を新たにした。

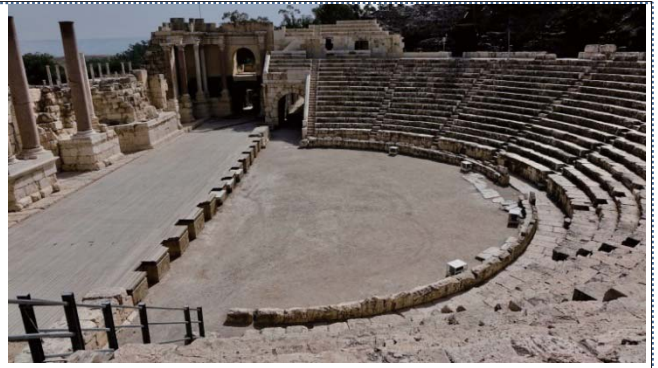
翌朝はガリラヤ湖から上る日の出を撮ってからミサに預かった。いよいよ山上の垂訓とガリラヤ湖である。バスで「山上の垂訓教会」に行った。ここは八角形の素敵な教会で聖堂の中央に十字架が立つ大きな聖櫃、その四辺に祭壇が配置され、床にはモザイク画がある。まるで四方から囲んでミサに預かるかのように感じた。バスでイエスが宣教の為に歩いて向かった道を下ってから至福の山に登った。直ぐに「此の辺りが説教の場所ですよ」と聞かされた。幅が15mほどで高さが3m位の大きな窪みが在った。当時はガリラヤ湖から直接、登って来たので結構大変な山登りであったと思う。はるか下の方にガリラヤ湖が見える。垂訓の場所（窪み）で、聖書を味わい、暫くの間、黙想した。窪みの周辺には花が沢山咲いていて、ゆったりと散策できた。井上さんの呼掛けに応じて見ると、今朝、下りて来た荘厳なV字の谷が見え、キリストと弟子たちの宣教の厳しさを感じずにはいられなかった。山を下りるとガリラヤ湖畔のペトロの信仰告白の像の近くで聖書を聴いてから、湖に下りた。淡々と波を打っていたが水を汲み、記念品とした。湖畔には漁の獲物を捧げた大きな石を聖堂の中心とした「ペトロ召命教会」が建っていた。昼食にガリラヤ湖で獲れた「ペトロの魚」で有名なティラピアの焼魚料理を美味しく戴いた。神父様が突然「コインが出てきた」と叫んだので大爆笑が起こった。勿論、聖書に記されたガリラヤ湖での逸話を伝える為のジョークでしたが……。午後は考古博物館で古代舟（長さ9m幅2.5m）を見学してから大きな甲板の木造船に乗ってガリラヤ湖クルーズを愉しんだ、想像以上に巨大な湖（霞ヶ浦程の広さ）で船の周りには沢山のカモメが集まり、我々が投げるパンを次々にキャッチして愉しかった。「嵐が来て船が沈むとか、沢山の魚で船が沈む」という聖書の話も納得できた。船からもV字の谷が見えた。その後、「ペトロの家教会」に行った。教会の床は透明板で造られており、床下には当時の集会場（広さが50畳ほど）があった。壁には12使徒の現代彫刻が施されていた。ここは数多くの奇跡が行われたカファルナウムの遺跡に囲まれている。また隣接する大きな神殿跡（シナゴーク）も見学した。

ガリラヤ湖





次に教皇ヨハネ・パウロ2世が建てた新旧共同体検討施設「ガリラヤの家」を見学した。出席者には個室が与えられ、自然と共に対話するように造られていて、中央のチャペルの上には金色の「イエスと12使徒」の像が乗っている。聖堂には5面四方の大きな壁画がある現代的な施設であった。翌日、ご変容のタボル山の計画だったので早朝のミサ後に出発したが待合所には既に沢山の方々が登山電車を待っていた。生憎の雨となり、また「登っても何も見えない」との説明があり、残念だったが山行きは断念して、荒れ野の旅（旧約時代）に向かった。途中にあるベト・シェンの遺跡に寄った。石畳の道は広く、長く、



ベト・シェンの遺跡

紀元1世紀なのに大劇場、浴場や大きな神殿もあり、大きな彫刻や美しいモザイク画が残っていた。当時の世界最先端の交易の街の豊かさが感じられた。バス移動の途中に、あのザアカイが登ってイエスを見たという大きなイチジク桑の木があり紹介された。上り坂を進んで着いた世界最古の街エリコは海拔-240mにあり、ここには駱駝が居てサタンの誘惑の山とケーブルカーで結ばれていた。上りたかったが予定にない為、私達は土産の棗を探すのに夢中になった。エリコの街を下りてヨルダン川に向かった。川には兩岸ともに兵士が銃を持って監視しており、緊張の高い一帯であるとの認識はできたが、表示はないが国境を守れば銃撃は無いと聞いた。こんな状況下でもためらわずにズボン巻いて川に入り、洗礼の約束を新たにされた。近くに欧米人の白装束グループが居て、同様に川に入り祝福を受けていた。ユダヤ兵は若く、にこやかで、兵士と私との記念撮影もできた。エンボケ（死海）に向かう途中にキリスト誕生の頃に書かれた「死海写本」で有名なクムランの遺跡に行った。そこは岩だらけの高地で、発掘されたのは修道生活をする人達が規約、神殿、集会所、生活場、貯水槽であるがこれらを造り、聖書の研究、祈りの生活を送ったという。最も驚いた事は人里を離れた岩の高地で家畜を飼い、器を焼き、生活や儀式用の水を自分達で刻んだ浅い水路で短い雨季の間に1年分を貯水していた事だ。私達現代人はもっと賢明に生きる必要があると思った。次にエンボケ（死海）に向かった。ホテルには死海と同じ塩分濃度のプールがあり、早速、巡礼の先輩を先生に弟妹揃って実習体験をした。躰をあおむけにするとゆったりできたが体位を変えると身体がくるくると回ってしまう、そこで備付のバーに掴まって寝返りの練習から始めた。年甲斐もなく大はしゃぎで練習した。翌日6時に有志集合で海拔-400mの死海を体験した。神父様と私達兄弟など10名程であった。水は冷たく、塩は固かった。神父様と私達で手をつなぎ宇宙遊泳？もして、塩を採集し、少ない時間を楽しんだ。朝食はジュースとピタパンの定食である。この日の最初はユダヤ人ガイドご自慢の遺跡「マサダ」だ。400m程の岩の高台で1世紀にヘロデが築いた砦。その後ユダヤ人が軍事拠点とした。後にローマに攻撃され1年の間、戦ったが最後は「生きて恥を晒すな」と妻子と共に集団自決を選んだとの事である。ロープウェイで登り、説明ビデオを視てから広大な遺跡を散策したが隅々までヘロデの力が見える遺跡だった。ネゲブ砂漠に向かったが最初はイスラエル建国の父が暮らしたキブツ（農園）を見た、そこでは丁度イスラエルの新兵集団が居たが銃を持って平和な遠足を楽しむ学生に映った。アブダットという隊商の為の街の遺跡を見てからミツベ・ラモンに着いた。ラモン・クレーター（地球のひび割れ）のある場所で、眼下に月面のように広がる岩山の景色は神秘的であった。翌朝バスで岩場を下り、カーペンターの石と呼ばれる4cm角程の柱状溶岩が山になっている場所を見た。初めて見る自然の造形であった。

続いてベエル・シェバというアブラハムとイサクを記念する街に行った。卵型の城壁に囲まれた旧約時代の遺跡である。石の祭壇や清めの水場なども実在した。バスが進み、ユダヤ人ガイドが見せたい場所がある、と高速道路を降りて行くと、ダビデとゴリアテの決戦の場所だそう。変哲もない草原ではあったが、聖書の場所を確定しガイドが誇らしく説明している事が素晴らしいと思った。続いて、マリアのエリザベト訪問の場所であるアイン・カレムに着いた。ここでは車用の斜面が造られた石段の道路を歩いて登り、頂上で高い尖塔の鐘楼を有する訪問教会に着いた。庭にはオリーブの花が咲き、内部の天井にはエリザベト訪問を初め、多くの壁画が描かれていて、とても素敵な教会であった。いよいよ、次はエルサレムだ。聖書に出て来る地名のプレートをいくつも見て行くと徐々に緑が増え、都が近い事を知る。私達のエルサレム入場はノートルダム・センターであった。バチカン所有で予約が取れないので有名だそう。ミサ後の夕食はいつも通りのバイキングだが、この日はワインで乾杯して祝い、大いに語り合った。翌日は先ずベツレヘムに行った。そこは塙に囲まれた街で、住民には我々のような自由が無いという。そんな暗い説明の後で、可愛い鐘楼の上に十字架を持つ壮大な「生誕教会」に着いた。高さが1km程の小さな入口で腰をかがめて中に入った。ここが主のご降誕の現場である。中は天井が高く壮大な教会であった。長蛇の列に1時間以上



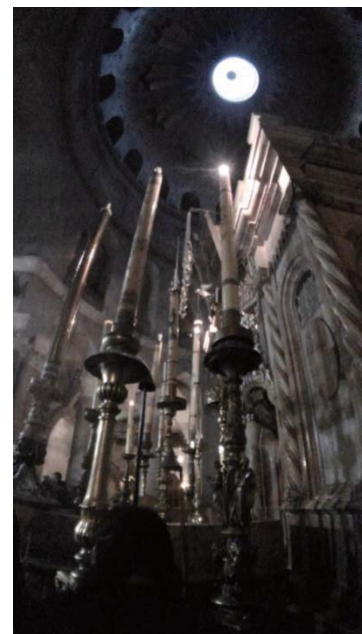
訪問教会

並び、ようやく着いた内陣は仏教寺院の如く飾り燭台が無数に吊り下がり、豪華絢爛である。さらに立派な祭壇の左に下りる階段があって、大勢の人と押合いながら下り、やっと生誕場所に着いた。夢中で祭壇の下に潜って拝んだ。神様ありがとう。一行は祭壇横にスペースを見つけ、日本語で「聖夜」を大きな声で歌った。2番は英語にしたら、多くの巡礼者が声を合わせてくれ、大感激の生誕教会となった。「羊飼いの教会」では命日である母の追悼ミサを挙げて頂くお恵みを得た。「聖なる洞窟」では短い聖句を味わった。また「クレージュ」という飼葉桶記念聖堂で素晴らしいクリスマスの壁画を見た。午後はシスターが経営している「聖ビンセント・ゲストハウス(乳児園)」を訪問した。聖地でも親と住めない薄幸な子供が多いのに驚く。許可が出るとすぐに飛び着いて来て手を繋いで喜んでいて。考えさせられる現実だ。

エルサレムに戻り、やっと聖墳墓教会を目指す事ができた。城門を入れて直ぐにアラブ・カトリック・スカウト会館があった。アラブのお店の通りをししばらく進み、アンナの門を通ると左手に凄く大きな建物があり、一段と下がった所に門がある。ここが聖墳墓教会だという。入って行くと多くの祭壇、像、絵画があり、キリストが十字架から降ろされる大きな壁画が有り、目前に黄金の壇があり皆伏し拝んだ。さらに進むと見上げるほどの荘厳な祭壇があり、燭台の太さは柱と間違えるほど太い物であった。見事なパイプオルガンの音が響き、ベネディクションが行われていて司祭が歌っていた。式後に右の階段を上ると厳かな3枚の壁画があった。丁度、真後ろに聖なる十字架が建てられた所があった。夢中で中に入り、手探りで、大理石を探し当てて感動した。帰りはアラブの店を覗きながらホテルに戻った。その夜はホテルで感謝のミサ。



羊飼いの教会  
クリスマス壁画



聖墳墓教会主祭壇

次の日はバスでオリーブ山(主が捕えられた場所)に登り、旧市街を眺めた。右の方には塙で囲まれた街があちこちに在った。見下ろすとキリスト教の墓地、万国民の教会、ゲッセマネの園がある。石灰石と緑の多いケドロン谷へキリストになって、徒歩で降り、万国民の教会で祈ってからゲッセマネの園を訪ね、イエスが抱いた石と古いオリーブの木に触れる事ができた。そこに建つ「主嘆きたもう教会」を見学後にエルサレムの西の壁を通り、考古学センターを見てからエルサレムの地下遺跡を巡った。足下に数十メートルの深さで垂直な大きな石で造られた堀が連なっており、古代からの深い歴史を感じた。この日はドミニコ会の神父様の話拝聴した。翌日はステファノ門からイスラム教の神殿の丘(金のドーム)に登り、朝日を浴びて輝くドームの前で記念撮影をした。イスラム教のモスクであり、中には入れなかったが門番の肩越しに覗くと美しい紋様の小さなタイルが貼られており豪華さを感じた。次に聖アンナ教会でのミサでは思いがけずに「われ神をほめ(テ・デウム)」を現地語に合わせて日本語で歌い、感動。続いて井上さんから十字架の道行きの説明があり現地ではVia Dolorosa(悲しみの道)と言う。との事。毎週金曜日にフランシスコ会士の行進がある。第一留はアラブ人小学校にあり、第二留は鞭打ちの教会にある。第三留から旧市街にあり、第十留以降は聖墳墓教会内にある。裁判の地である修道院を訪ね、次に十字架を背負ったキリストの壁画や当時の石畳みの道を見学してからVia Dolorosaを始めた。第三留から順に壁、堂の中、軒下に掲示された道行の前で先唱、朗読を交代しながらキリストの苦しみを黙想しながら進んだ。聖墳墓教会では第十留からまわり、第十四留でジュード神父様の司式で復活のミサを奉げ、道行は終了となった。聖墳墓教会専任オルガニストのヤコブさんは一緒に歩いてくれるとの事。それから教会内部を巡ると上を向いても横を向いても、素晴らしい物ばかりが目に入った、また、イエス時代の洞窟や石が残されていて、凄いに尽きる。右後ろの階段を上ると今まで見えなかった「嘆きの聖母」の御像が眼に入り、聖母の眼差しの切なさ、やるせなさが伝わってきて胸が熱くなった。

次の日はバスでオリーブ山（主が捕えられた場所）に登り、旧市街を眺めた。右の方には塙で囲まれた街があちこちに在った。見下ろすとキリスト教の墓地、万国民の教会、ゲッセマネの園がある。石灰石と緑の多いケドロン谷へキリストになって、徒歩で降り、万国民の教会で祈ってからゲッセマネの園を訪ね、イエスが抱いた石と古いオリーブの木に触れる事ができた。そこに建つ「主嘆きたもう教会」を見学後にエルサレムの西の壁を通り、考古学センターを見てからエルサレムの地下遺跡を巡った。足下に数十メートルの深さで垂直な大きな石で造られた堀が連なっており、古代からの深い歴史を感じた。この日はドミニコ会の神父様のお話を拝聴した。翌日はステファノ門からイスラム教の神殿の丘（金のドーム）に登り、朝日を浴びて輝くドームの前で記念撮影をした。イスラム教のモスクであり、中には入れなかったが門番の肩越しに覗くと美しい紋様の小さなタイルが貼られており豪華さを感じた。次に聖アンナ教会でのミサでは思いがけずに「われ神をほめ（テ・デウム）」を現地語に合わせて日本語で歌い、感動。続いて井上さんから十字架の道行きの説明があり現地ではVia Dolorosa(悲しみの道)と言う。との事。毎週金曜日にフランシスコ会士の行進がある。第一留はアラブ人小学校にあり、第二留は鞭打ちの教会にある。第三留から旧市街にあり、第十留以降は聖墳墓教会内にある。裁判の地である修道院を訪ね、次に十字架を背負ったキリストの壁画や当時の石畳みの道を見学してからVia Dolorosaを始めた。第三留から順に壁、堂の中、軒下に掲げられた道行の前で先唱、朗読を交代しながらキリストの苦しみを黙想しながら進んだ。聖墳墓教会では第十留からまわり、第十四留でユダヤ神父様の司式で復活のミサを奉げ、道行は終了となった。聖墳墓教会専任オルガニストのヤコブさんは一緒に歩いてくれるとの事。それから教会内部を巡ると上を向いても横を向いても、素晴らしい物ばかりが目に入った、また、イエス時代の洞窟や石が残されていて、凄いに尽きる。右後ろの階段を上ると今まで見えなかった「嘆きの聖母」の御像が眼に入り、聖母の眼差しの切なさ、やるせなさが伝わってきて胸が熱くなった。翌日は「マリア永眠教会」である。六角形の塔を持つ教会で、床にはモザイクで聖人の名が記されている。続いてヤコブさんと一緒にペトロの三度の否みを記念する「鶏鳴教会」へ行った。勿論旧市街の外である。エルサレムのジオラマを見ながら当時の説明を受けた。使徒ペトロの弱さ、辛さを思い起こした。教会の地下にはキリストが入れられた牢屋跡があった。教会から下を見降ろすとロバを飼う家族が見えた。聖墳墓教会で、夕べのミサに預かった。



鶏鳴教会

翌日は「西の壁」を目指した。

銃を持った兵士によって入場チェックを受けて城内に入り、最初は考古学センターでエルサレム遺跡を学んだ。当時のエルサレムが非常に高い場所にあり、大変な工事の末に築かれていることが理解できた。城はいたるところに要塞としての名残を見せていた。神殿の前で商売をしている壁画もあり聖書を味わった。有名な「嘆きの壁」は男女に分かれて壁に向かって祈り、訴えている。男性はユダヤ教の帽子を被って入る。

黒服に黒シルクハットのユダヤ教師が大勢居て聖書を読んでいたが彼等には税免除の特権があるそうで、一般のユダヤ人からは「カラス」との蔑称で呼ばれているという。最後にエマオと呼ばれているベネディクト大修道院を訪ね、夕の祈りを共にした。古い壁画が書かれた大きな聖堂内にシスターの方の奏でる聖歌が美しく響き、心が洗われ旅の終わりにふさわしい、ひとときを過ごした。その日の夜に、出国審査の厳しいベングリアン空港から飛立ち聖地の旅は終わった。キリストのように生きたいとの思いを



ベネディクト修道院



告知教会小聖堂



嘆きの聖母

新旧共同体  
検討施設



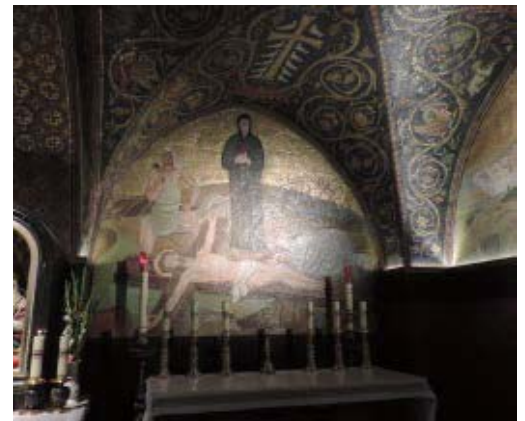
V字の谷



山上の垂訓



ヴィア・ドロローサ  
(十字架の道行き)



聖墳墓教会

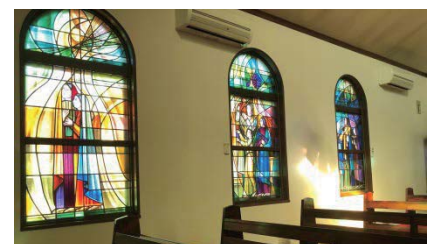
編集後記；ルツ記におけるベツレヘムの描写

聖地巡礼の話をしていて、ルツ記はベツレヘムだと言われて、そうだったかと思いルツ記を読み直した。その頃もベツレヘムは乾燥した土地で、頻りに干ばつがあったのだろう。飢饉に遭ってベツレヘムを離れたエリメレク一家はモアブの地に住み着いた。その後、エリメレクは死に、二人の息子も死んでしまう。

妻のナオミは二人の嫁と残されてしまい、故郷ベツレヘムへ帰ることを決断する。ナオミと共にベツレヘムに帰ってきたのは嫁のルツであった。ルツはエリメレク一族であるボアズと結婚し、男の子を産み、オベドと名付けた。オベドはエッサイの父、エッサイはダビデの父である。ベツレヘムの大麦畑で落穂を拾うルツの姿と、彼女を慈しむボアズには、厳しい自然の中で命をつなぐ人間の宿命を感じる。この家系に生まれたのがダビデであり、そしてイエスであることは、やはり不思議でならない。那珂教会に在るステンドグラスは、一番祭壇側にルツとナオミが飾られている。教会周辺の農家には麦畑もある。風にゆれる麦の穂を見る季節になると、むせかえるような麦の香りがステンドグラスから溢れてくるように感じる。ここにもまた、ベツレヘムの風が吹いているかのように。

今年もまた、聖劇の歌が響くだろうか。

「遠い町ベツレヘム、もうすぐで一すよー♪」



那珂教会ステンドグラス